愛媛大学教育学部保健体育紀要第5号：29-35，2006

バリ島の儀礼格闘技カレカレアンの起源と伝播

石井　浩一[1)]

The origin and diffusion of ritual combat *Kare-karean* in Bali Island

Hirokazu Ishii[1]

Key words : war , religional ceremony , *Tabuh Rah*

(Bulletin of Department of Physical Education, Faculty of Education, Ehime University, 5, 29-35, March , 2006)

キーワード：戦争，宗教儀式，タブ・ラ

はじめに

本研究は，バリ島の２つの村だけに確認される格闘技カレカレアン（*Kare-karean*）[1)]について考察するものである．

バリ島は世界的に有名な観光地である．オランダ植民地時代の約360年間，バリ島においては政治的意図から文化変容抑止政策がとられ，オランダ人行政官の研究対象とされた．普通植民地というと，そこには宗主国の文化が移植され，すっかり変化してしまうことを想像するが，バリの文化は保護された．こうした背景があったからこそ，独立後のインドネシア共和国の中で，バリ島は世界的観光地たり得たといえる．逆にいえば，バリは観光しか生きていく道がないともいえる．もしバリから観光を取ったら，バリの経済は破綻するだろう．バリには外貨を獲得する他の手段がないからである．

インドネシアで最も豊かな島といわれるボルネオ島（内70%がインドネシア領カリマンタン）には石油，天然ガス，木材，金がある．それと比べれば，バリは何もないに等しい．したがって，観光業に携わることができない人々（例えば，先進国の公用語ができない人）は，とても貧しい．これがバリの現状である．

バリを訪れる観光客の嗜好は大きく２つに分れるだろう．一つはマリンスポーツ派．サーフィン，パラセーリング，シュノーケリング，ダイビング，海水浴．もう一つは文化観光である．バリの「何となく神秘的」な雰囲気を皮膚感覚で感じとりたいという人々である．後者では，遺跡，寺院，葬式ツアー，ケチャ，バロン，レゴン，バリス，ガムランなどの芸能が用意されている．しかしながら，カレカレアンについてはあまり知られていない．観光パンフレットに載ってはいるが，この格闘技を観るために，首都デンパサールから東へ70kmも離れた所に来る観光客はほとんどいないだろう．またこの格闘技は１年に１回しか行われない．先に述べた常時公開されている芸能とは異質のものだからである．

１年に１度，村の儀式において，腰布だけを付けた１組の男性が楯と武器を持って闘い，互いに傷つけ合う．カレカレアンを端的に説明するとこうなるが，この種の格闘技は，日本に存在しない．まずこの点が本研究の第１の動機である．スポーツ人類学の研究者は，自国のスポーツ文化との乖離が大きい（すなわち，カルチャーショックが大きい）程，研究心をかき立てら

1）愛媛大学教育学部
〒790-8577　愛媛県松山市文京町３番

1．*Faculty of Education, Ehime University, Bunkyo-cho 3, Matsuyama-shi, Ehime, 〒790-8577, Japan*

れる.

写真　カレカレアン（筆者撮影）

第２の動機として，カレカレアンを真正面から研究した研究者がほとんどいないということである．カレカレアンに関する今日迄の著作は断片的で，その全体像は明らかにされてこなかった．また，カレカレアンがなぜこの２つの村だけにあるのか．この点についても不明である．したがって本研究は，まず第１にカレカレアンの様態を明らかにするとともに，その起源について考察する．第２に，２つの村の関係を明らかにすることによって，なぜこの２つの村がカレカレアンを所有しているのかについて考察する．

本研究の方法は，これまでカレカレアンについての記述がある文献の解読及び分析．加えて，筆者が行ったフィールドワークで得られたフィールドデータの分析という方法を用いた．フィールドワークは，1999年6月～7月，11月．2000年8月．2005年8月～12月に行った．本文中，特に注を付していない箇所は，筆者の聞き取り情報に拠るものである．

Ⅰ　カレカレアンを保持する2つの村

バリ島はインドネシア全33州の１州である．「ドル箱」といわれるングラー・ライ（Ngurah Rai）国際空港のあるのが州都デンパサール（Denpasar）．そのデンパサールから東へ約70km．カランアスム県(Kabupaten Karangasem）マンギス郡（Kecamatan Manggis）に２つの村はある．パンドゥク（Pandek）川を渡ってすぐ左へ曲がり，つきあたりの村がトゥンガナン・プグリンシンガン慣習村(Desa Adat Tenganan Pegringsingan；以下ＴＰと略す)．パンドゥク川を境に，西側に位置するのがトゥンガナン・ダウトゥカット慣習村（Desa Adat Tenganan Dauh Tukad；以下ＴＤＴと略す）である．２つの村の境界は川だけである．1980年代にチャンディダサ（Candidasa）[2] から直通の道路ができる迄は，歩いて川を渡らなければならなかった．この地理的条件がＴＤＴを未知の村にしていたといえる．ＴＰはオランダ時代から植民地行政官らによって保護され，コルン（V.E.Korn）のような慣習法学者の研究対象となった.[3] また，ミゲル・コヴァルヴィアス，マーガレット・ミード，グレゴリー・ベイトソン，ウォルター・シュピース，コリン・マックフィー等の著作を見れば明らかなように，1930年代には，諸外国にその名を知られていた．空港がまだなかった当時，彼らは北のブレレン港（旧ブレレン王国の都）からＴＰに入った．彼らの観たＴＰは，他の村とは異なる文化を有しており，バリ・アガ（Bali Aga）[4] の代表格として広く知られることになったのである．しかし，同じくバリ・アガで川をはさんで隣接するＴＤＴについては，近年ジンバーガーの博士論文が出るまでは全く研究されてこなかった.[5]

双方の村名に冠されているトゥンガナン(Tenganan)とは，「内」「中」「奥」を意味する「tengah」→「tengahan」→「tenganan」と変化したといわれる．プグリンシンガン(Pegeringsingan)は「グリンシン(geringsing)のある所」を意味する．グリンシンとは，経緯絣の織物のことで，インドネシアではこの村にしかない．日本では，江戸時代に経緯絣が流行したらしい．グリンシンはこの村の特産品として，村内で販売されている．ＴＰは現在，カンギン（Kangin＝東）とカウ（Kauh＝西）と呼ばれる丘の間に位置し，南北500m，東西250mの長方形の生活領域の他，840haに及ぶ広大な領地を所有している．この領地には，巨石信仰が確認される．これは，彼らがウォン・マジャパイト(Wong Majapahit＝16世紀からのジャワ島イスラーム化により，マジャパイト王国からバリ島に移住してきたヒンドゥー教徒とその子孫）以前の古い文化の相続人であることを示す．

1970年代後半からチャンディ・ダサがリゾート開発されたことによって，この村を訪れる観光客はにわかに多くなった．それまで椰子の木と小さな漁村しかなかったチャンディダサには，ホテル，レストラン，銀行，スーパーマーケット，アートショップが建ち並び，すっかり様変りした．ＴＰには毎日のように観光客が訪れるようになり，近年駐車場が拡張され，店も増えた．

一方，ＴＤＴのTengananの意味はＴＰと同じである．ダウトゥカット(Dauh Tukad)の「Dauh」は「西」，「Tukad」は「川」を意味する．すなわち，「川の西のトゥンガナンの村」という意味になる．先に述べたように，チャンディダサからＴＤＴ迄の直通道路はできたが，ＴＰと比べると，あまりにも傷みが激しい．全く補修され

ていない証拠である．駐車場は拡張する必要がない程広いのだが，寂しい程空いている．観光客はたまにしか訪れない．

ＴＤＴはＴＰと比べると，かなり小さい．村の領地は200ha．その内約半分が生活領域である．ＴＰとＴＤＴは，インドネシア共和国建国以後新たに区分されたデサ・ディナス（Desa Dinas）[7]に編入されることになった．行政側からは，ＴＰ，ＴＤＴ，グムン(Gumung)村，カウ丘，カンギン丘，サンヤンガピ(Sangyangapi)，チャンディダサの一部を含めた地域一帯をトゥンガナン村（Desa Dinas Tenganan）としている．この行政村はなじみの薄いものである．彼らのアイデンティティは，あくまでデサ・アダット（慣習村）にある．「ゆりかごから墓場まで」は，すべてアダットによって決められている．アダットは日本語で「慣習」と訳されるが，含意は広く，「法，規則，伝統」すべてを含む．すなわち，彼らの生活そのものといってよい．したがって，生活様式の異なる村を為政者の都合で線引きしたのがデサ・ディナス（行政村）ということになる．しかし，ことＴＰとＴＤＴに関しては同じTenganananを冠することから，縁戚関係を伺わせる．バリ島の他のどの村にもない格闘技が，この２つの村だけに所有されている．

Ⅱ　宗教儀礼としてのカレカレアン

結論を先に述べると，カレカレアンはＴＰとＴＤＴの宗教儀礼の一部であって，他のいかなる時にも行われない．インドネシアに「伝統スポーツ」と命名されたものはたくさんあるが，筆者はカレカレアン以外に，宗教儀式の中にとどまっているスポーツを知らない．カレカレアンと類似の格闘技はインドネシア各地にある．例えば，トゥンガナンの東，同じカランアスム県にあるスラヤ村のグブツ・エンデ（Gebug Ende），ロンボク島のプレシアン（Peresian），スンバワ島のカラチ（Karaci），フローレス島のチャチ（Caci）などである．いずれも，防御用の楯と攻撃用のスティックを用いる格闘技である．

筆者は，2005年8月，東カリマンタン州トゥンガロンで開催された第５回伝統スポーツフェスティバルを観察した．このフェスティバルは，インドネシア共和国青年スポーツ省が実行委員会をつくり，各州から毎年一つずつ伝統スポーツを披露してもらい，実行委員会の委員が採点し，順位を付け，表彰するという仕組になっている．グブツ・エンデは第２回に出場している．今回の第５回には，バリ州からマチュプトゥ・チュプタン（Macepd Cepetan）という武術が出場した．しかし，カレカレアンは絶対にこのフェスティバルには参加しない．バリ・アートフェスティバルへの参加も拒否している．すなわち，カレカレアンは宗教儀礼の一部であるから，例え行政府から要請を受けても，金銭的報酬が用意されていても出ない．それはアダットに反することであると．このことはＴＰ，ＴＤＴ双方のインフォーマントが言明している．

カレカレアン（*Kare-karean*）の「Kare」とは，古バリ語で「ひっかく」「こする」を意味する動詞である．インドネシア語では Menggeret Pandan あるいは Perang Pandan という．この古バリ語とインドネシア共和国の新しい言葉にカレカレアンの原初形態を伺わせるキーワードが含まれている．

カレカレアンは，トゥンガナン暦で[9]，サシー・クリマ(Sasih Kelima＝第5の月．西暦では6月～7月に相当)の時，最も盛大なウサバ・サンバー（Ngusaba Sambah）の中でのみ行われる．トゥンガナン暦の第５の月というのは，ウォン・マジャパイト暦（一般の書店等で売っているバリ暦）では，サシー・カロ（8月～9月）あるいはサシー・クティガ（9月～10月）に相当する．ウサバ・サンバーは約１ヶ月続き，その間にカレカレアンは４回行われる．

最初はバレ・アグン(Bale Agung)で表象的に行われる．つまり，闘わない表象カレカレアンである．この表象カレカレアンは，クラマ・デサ（Krama Desa＝村落会議のメンバー)の代表者とクリアン・グミ(Kliang Gumi＝クラマ・デサ以外の村の代表者）によってのみ行われる．次のカレカレアンは，プトゥム・クロッド（Petemu Kelod）で行われる．これも表象で，闘わない．その次に行われるカレカレアンが実際に闘うカレカレアンで，初日はプトゥム・カジャ（Petemu Kaja）で行われる．

カレカレアンには必ず演奏が伴う．「音楽」ではない．カセットやＣＤに録音された音ではだめなのである．すなわち，村に先祖代々受け継がれてきた特定の楽器を村人が奏でることによって響く「生きた音」でなければならないのである．この点が，近代スポーツに馴らされてしまった人間の感性にはとても神秘的に映り，カルチャーショックを受ける．演奏はスロンディン（Selonding）という金属製のガムランで，バリ・アガ特有の楽器といわれている．スロンディンは，プトゥドゥ（Petudu），ニョンニョン（Nyongnyong），クンプル（Kempel），ゴン（Gong），チェンチェン(Ceng-ceng)，プヌマン（Peneman）から編成され，村人以外は演奏はむろんのこと，触れることすら禁止されている．また，原則録音も禁止である．もし，村人以外が触れたり，地に落したりした場合は，例え儀式の最中

であっても，儀式を中断してスロンディンを浄化するための儀式を行わなければならない.[10]

バリでは金属そのものに霊力が宿ると信じられている．したがって，金属製品を作る鍛冶師たちは霊力を持つ人々といわれる.[11] 金属に霊力が宿ることを観光にしているのが，有名なクリス・ダンスである．トランスに陥った男たちが自らの体に剣（クリス）をつき立てて，あらぶる．時にはチャロナラン（バロン劇）の中でも行われる．ＴＰの男性は儀式中はむろんのこと，外出する際にもクリスの携帯が義務付けられている．これを怠ると，アダットを犯したことになり，罰則が科せられる.

スロンディンの奏者はすべて男性である．カレカレアンは１対１の男性のみで行われる．すなわち，カレカレアンを執行する中心は男性のみで，女性は関わらない．女性は神に捧げる供物の準備をしたり，神が降臨する玉座に供物を献納したりすることが主な務めで，カレカレアンを観ることすらしない.

カレカレアンを奉納するために集まった男性たちは，まず自分に合うタミャン（Tamiang）を選ぶ．タミャンとは防御用の楯の名称である．タミャンの材料はアタ（Atta＝水辺に自生するツル科植物），ロタン（Rotan＝籐），木材，シュロの幹の繊維などを用いて作られる．大人用のタミャンは直径約60cm．子供用は約45cmである．タミャンの裏面の把手は20～30cmである．まず，左手を穴に通し，続いて把手に手を通す．左腕の関節は身体により近接している把手によって保護され，左手首の関節はもう一つの把手をしっかりと握ることによって自身にとってちょうどよい状態になる．タミャンはとても丈夫で，めったに壊れない．村の倉庫に保管され，儀式の時にまた出して繰り返し使用される.

右手はパンダン（Pandan）である．パンダンとは植物の名称で，学名はパンダヌスといい，数百種類あるという．日本では小笠原諸島に自生するという．パンダンは闘う相手の体を打ち，ひっかいて傷つけるための攻撃用具である．カレカレアンで用いられるのはパンダン・ルンギス（Pandan Lengis）という種類で，トゥンガナン地域に自生している．これ以外の種類は刺がないか，また刺があっても大変危険なので用いられないという.パンダンの葉は30～40cm位に切り落し，握る部位は約8cm位刺を取り除く．それを4～5枚重ねてばらばらにならない様に，紐でしっかりと括る．これで攻撃用具の完成である．タミャンに対して，パンダンは使い捨てである．次の儀式の時には，また大量に伐採される.

ユニフォームは，腰から尻にかけて巻きつけたクンブン（Kenben），サプッ(Saput）と呼ばれる膝下までの布およびスレンダン（Selendang）という腰帯を着用しなければならない．カレカレアンの方法は，パンダンで相手の体を打ち，ひっかいて傷つけることである．パンダンで攻撃されたら，タミャンで防御する．攻撃してもよい部位は首から下，腰から上までで，顔は禁止である．このように，カレカレアンに一定の規則はあるが，勝ち負けという用語はない.

準備が整った１組の男性は，進行係の若者に促されて対峙し，闘いが始まる．勝ち負けはないから，審判はいない．２人は互いに機敏に動き回り，攻防を繰り返し，傷つけ合う．パンダンの刺は体に突き刺さり，肉を裂き，新鮮な血がだらだらと流れ出す．にもかかわらず，彼らは時々微笑を浮かべるのである．試合はどちらか一方あるいは双方流血が確認されたら，進行係が試合を終了させる．試合は約30組行われ，３時間程続く.

２日目は，はるか昔からゴトン・ロヨン（相互扶助）で結ばれている近隣の３つの村を招待し，プトゥム・トゥンガー（Petemu Tengah）で交流試合を行う．むろん，この試合にも勝ち負けはない．３つの村とは，ニース（Ngis），タナハロン（Tanaharon），そしてＴＤＴである．ＴＰと３つの村との関係を簡単に説明しておこう.

①ＴＰとニースの関係

旧カランアスム王国時代，王への助言者としてニース村の人間が重用されていたという．王国消滅後もなお，ニースの長老一家はＴＰに住み，村落会議の時に「証人」という立場で指定席につくことになっている．また普段から，儀式に必要な物品の譲渡，貸与の関係にある.

②ＴＰとタナハロンの関係

タナハロンのアダットによる儀式の内，海岸で行われる儀式のときは徒歩で移動するが，その通過点にＴＰがある．タナハロンの人々はＴＰに一泊し，飲食物の提供を受ける．その後，海岸での儀式のあと，またＴＰに一泊する．こういう関係にある.

③ＴＰとＴＤＴの関係

後節で詳述する.

一方，ＴＤＴのカレカレアンは一日だけで，交流試合はない．カレカレアンのルール，用具，ユニフォームはＴＰと同じである.

Ⅲ　カレカレアンの起源と機能

1　戦争とカレカレアン

バリの古代史文書『ウサナ・バリ』(Usana Bali)

に拠れば，カレカレアンは力強さと勇敢さを試すためにあるという.[12] そしてこの格闘技は，戦争の神であるインドラ（Indra）を奉る儀式であると伝えられる.

神話に拠れば，現在のトゥンガナン地域はかつて残忍かつ権威をふるう一人の王の支配下にあったという．その王の名をマヤ・デナワ（Maya Denawa）といい，あたかも神のごとく権威をふり回し，バリ人の宗教儀式を禁じた．マヤ・デナワの暴挙は神々の怒りにふれることになり，マヤ・デナワに対抗する神としてインドラが選ばれた．インドラは戦争の指揮を執る特別任務を委ねられ，マヤ・デナワに対抗した．激しい戦争の末，マヤ・デナワは敗北し，代ってインドラがトゥンガナン地域を統治することになったという.

ＴＰの人々は，インドラが村の創造神であると信じている．インドのヒンドゥーでは下位のインドラが，ＴＰでは祖先と村を創った神なのである．またインドラは，戦争の神である．加えて，トゥンガナン地域の人々はカランアスム王国時代，有力な兵士であったといわれる．時代は変り，戦争がなくなり，軍事訓練の必要もなくなったが，村人はカレカレアンとして，村の儀式の中にのみ残したと考えられる．Ｎ.Ｎ氏によれば「カレカレアンは神への崇敬のシンボルであると同時に，様々な邪悪なるものと戦わなければならない我々の宿命である」[13] という．しかし，このことを以てカレカレアンを行うことの意味を解釈することはできない．次に問題となるのは「流血」である.

2 タブ・ラとカレカレアン

なぜわざわざパンダンを使って血を流さなければならないのか．戦争の残存だけならば，けがをしなくてもすむ用具に変えて儀式を行う方法がある．戦闘舞踊に変化させる方法もある．カランアスム地方のみならず，インドネシアの各地に戦闘舞踊がみられる．スラヤ村のグブッ・エンデやロンボク島のプレシアンの様に，安全な用具に代えて行っている所もある．すなわち，すでに実用性は必要ないのだから，わざわざけがをする形態をとらなくてもよいのではないかということである．しかしながら，カレカレアンでは流血を必要とする．この点については，『ウサナ・バリ』および他のロンタル文書にも記述がないという．ではなぜ，流血の格闘技を行うのか．この点について，インフォーマントからの言明はないが，タブ・ラと関係があるのではないかといわれている.

タブ・ラ（Tabuh Rah）とは，taurとrahの合成語であるという．tabuh は，taur → tabur → tabuh と変化した．原語taurの意味は「代償」「つぐない」である．rah は darah → rarah → rah と変化した．原語 darah の意味は「血」「血液」である．すなわち，タブ・ラとは「血のいけにえ」を意味する.[14] タブ・ラはプレ・ヒンドゥーから様々ないけにえの儀式にみられ，バリではブタ・ヤドニャ（Buta Yadnya）あるいは，一般的にはムチャル（Mecaru）という儀式と関連してタブ・ラが行われる.[15]

タブ・ラは元々人間を使っていたと考えられる．すなわち，誰かを殺さなければならなかったのである．しかし，文明が起り，人々の考え方が変化していくに伴って，人間のいけにえは牛，水牛，豚，あひる，鶏に代えられていった．ＴＰ，ＴＤＴを含めたバリ・アガの村でも，ウォン・マジャパイトの村でも，儀式に応じてこれらの動物がいけにえとなる．しかし，ＴＰに関していえば，巨石信仰に代表されるように，ウォン・マジャパイトよりもはるかに古い文化を保持している．以上のことから考えてみると，カレカレアンは古い形態のタブ・ラの残存ではないかという仮説ができる．この仮説に基けば，なぜ刺のある植物を剣にみたてて闘い，血を流さなければならないのかという疑問が解けてくる．では，戦争文化の残存とはどう関連するのか．現時点では次のようになろう．すなわち，カレカレアンは戦争文化の残存として宗教儀式の中に組み込まれ，後にタブ・ラと習合して現在の形態になったと推察されるのである.

Ⅳ カレカレアンの伝播

なぜＴＰとＴＤＴの２つの村がカレカレアンを所有しているのか．このことを考察するに当っては，まず初めにＴＰとＴＤＴの村の歴史から調べなければならない．伝説によれば，ＴＰとＴＤＴの祖先は元々チャンディダサの遺跡の近くの海岸端に住んでいたといわれる．『ウサナ・バリ』にはトゥンガナンという村名はなく，当時はプヌグス（Peneges）村といった.[16] 村人たちは，海に棲息するプス（Pesuh）という口のとがった大蛇のような魚に襲われ，とうとう最後には怖れをなしてこの地を跡にし，徐々に内陸部に移住していったとされる.[17]

時は18世紀．現在のトゥンガナン地域すなわち東はブウウ（Buu）川まで，北はグムン（Gumung）村まで，西はパティワサン（Patiwasan）川まで，南は海岸まで．ここはドゥク・ムンク（Dukuh Mengku）の領土であった．この地域は，現在のトゥンガナン行政村にほぼ匹敵する．ドゥク・ムンクには ドゥ・ムンク（De Mengku）という息子が一人いて，ドゥク・ムンク統治時代は平穏で繁栄していた．ゲルゲルの王は，ドゥク・ムンクの政治的・宗教的指導力を脅威に感じてい

た．かたやドゥク・ムンクはゲルゲルの権力に対して服従する気はなかった．

息子ドゥ・ムンクは，ゲルゲル王朝から現在のＴＰである命令を受けた．それ以前にも，ゲルゲルからは何度も使節が送られていた．命令の内容は，ドゥ・ムンクを闘鶏の世話係としてよこせということであった．つまり，息子を人質として取るということである．父ドゥク・ムンクは何度もその命令をはねつけていたあげく，ゲルゲルの王は怒り，配下のイ・グスティ・ングラー・シドムン(I Gusti Ngurah Sideman) とイ・グスティ・ティングル (I Gusti Timbul) に出兵を命じた．この２人に率いられた軍隊は，現在のＴＤＴでドゥク・ムンクの軍隊を粉砕し，ドゥク・ムンクは殺された．その場所は，現在ＴＰの南側に位置するプスダハン (Pesedahan) 村の一部となっている．死を逃れた人々は西の方に逃げ，新たに村を作った．これが現在のプカラガン(Pekarangan)村である．現在のＴＤＴの地で，最高指導者としての権限を与えられたイ・グスティ・ングラー・シドムンは，王ゲルゲルから現在すでにあるアダットを変えてはならないと命じられたという．したがって，ドゥク・ムンク時代のアダットはいつ迄かはわからないが，しばらくは残っていたということになる．以上が現在判明しているＴＰ，ＴＤＴの前史である．[18]

では，カレカレアンに関して２つの村の関係はどうなのか．先に述べたように，カレカレアンはトゥンガナン暦のサシー・クリマのウサバ・サンバーの期間中に行われる．そして，カレカレアンはＴＰが先に行う．カレカレアンのみならず，他の儀式も同様である．すなわち，ＴＤＴの宗教儀式の日程はＴＰの人が月を計算して決めており，ＴＤＴではサシー・クリマになったにもかかわらず，サシー・クナム (第６の月) に行われる．約ひと月の違いがあるが，どうしてこうなるのか現在はっきりしたことはわからない．

村の中を概観すると，ＴＰの方がＴＤＴよりかなり古い文化を保持していることがわかる．その一つが，先に述べた巨石文化である．また，儀礼用具に目を転じてみると，例えばカレカレアンのタミャンはＴＰ原産である．ＴＰでは，タミャンと同じ材料を使った手工芸品を多数販売しており，海外にも輸出している．実はこの手工芸品は，タミャンの作り方を応用したものだといわれている．[19] また，ＴＰの名称にもなっているグリンシンは，ＴＤＴでも作り，販売しているが，ＴＰ原産である．また，寺院建築の様式を見てもＴＰとは明らかに違う．ＴＤＴには，ウォン・マジャパイトのヒンドゥー文化の伝播がみられるのである．

ドゥク・ムンクの時代，息子ドゥ・ムンクは現在のＴＰの地でゲルゲルから命令を受けた．そして，父ドゥク・ムンクは現在のＴＤＴの地で戦いの末，果てた．ＴＰとＴＤＴは元は同じ村だったと考えられる．いつしかその村は，２つの異なる慣習村に変ってしまった．しかし，なぜかカレカレアンは宗教儀礼として残された．したがって，ＴＰからＴＤＴにカレカレアンが伝播したことはまちがいない．

まとめ

本研究は，これまで明らかにされてこなかったカレカレアンについて，その様態を明らかにし，起源と伝播について考察を試みた．これまで述べてきたことに，筆者の私見を加えてまとめると，以下のようになろう．

(1) カレカレアンは，初め軍事訓練として行われていたと考えられる．その時どのようないでたちで，どのような道具を使っていたかは不明である．戦争のない時代となり，村人は創造神であり，戦争の神でもあるインドラを奉る宗教儀礼として，カレカレアンを残した．したがって，戦争文化の残存であるから，男性のみで行われる．

(2) 時代は不明だが，戦争文化の残存としてのカレカレアンは，プレ・ヒンドゥーの文化タブ・ラと習合し，流血が必要となった．刺状植物パンダンを用いるのは，流血を促すためと考えられる．

(3) ＴＰとＴＤＴは元は一つの村だった可能性が高い．しかし，確定できる史料及び資料はまだ確認されていない．ＴＰとＴＤＴの前史，文化の比較から見て，カレカレアンはＴＤＴに伝播したと考えられる．

カレカレアンの研究は始まったばかりである．特に今後は，カレカレアンの文化変容についてフィールドワークを進めていきながら，徐々に明らかにしていかなければならないと考えている．

注記および引用・参考文献

1） ムカレ (Mekare)，カレカレ (Kare-kare) の表記もみられるが，これは動詞であり，スポーツの名称にはならない．したがって筆者は，このスポーツの名称を固有名詞*Kare-karean* とする．

2） トゥンガナン行政村とブグブグ (Bugbug) 行政村にまたがる地域で，この地にある寺院遺跡チャンディダサが，そのまま地名になっている．

3） 植民地統治の必要性から慣習法学派が生まれた．コルンはＴＰのアダットを研究し，一冊の本を出している．

De Dorpsrepubliek Tenganan Pagringsingan, Uitgeverij C.A. Mees, Santpoort, 1933

4) バリ島の先住民．バリ・ムラ（Bali Mula）とも呼ばれる．バリ・アガは侮蔑的ニュアンスを含んでいるので，バリ・ムラの方が適切という見方もあるが，一般にはバリ・アガと呼ばれている．

5) Angela Francais-Simburger 1998 "Politics of the Center" in Bali's Cultural Periphery: Transformations of Power in an Old-Balinese Village Mandala. , Dissertation , The City University of New York.

6) インドネシア共和国第２代大統領スハルト時代に開発が推進された．1969年～開発５ヶ年計画が策定され，チャンディダサは第３次５ヶ年計画（1978～83）の末期からリゾート開発された．

7) 行政村ができたことによって，従来の慣習村には慣習村長と行政村長がおかれることになった．

8) Simberger，前掲書 p.312

9) トゥンガナン暦は３年周期で，１ヶ月26日～30日で12ヶ月ある．３年に１度，閏月の27日間を４月と５月の間に入れる．１年目360日，２年目352日，３年目383日で，３年間の日数は365日の３倍と等しい1095日である．（村田悦子 1992 テンガナンの暦と祭式，環太平洋文化 第４号，p.61）

10) 外国人観光客がさわった時には儀式を中断して浄化し，罰金を科せられた．他村の子供がさわった時は，子供ということで罰金は科せられなかった．

11) ＴＰの東集落のパンデには，かつて多くの鍛冶師家族が住んでいたが，今は数軒しか残っていない．

12) Anak Agung Gde Putra Agung 1980/1981 Magebug dan Mekare Seni Tari Tradisional di Karangasem Bali, Proyek Media Kebudayaan Jakarta, Direktorat Jenderal Kebudayaan, Departmen Pendidikan dan Kebudayaan, p.22

13) Perang Pandan di Karangasem, KOMPAS 2005年7月13日，p.38

14) I Ketut Ginarsa 1994/1995 Cockfight in Bali, Cultural Media Project, Directorate General for Culture, Department of Education and Culture, p.18 （インドネシア語版：Adu Ayam in Bali, p.20）

15) 同上

16) Anak Agung，前掲書，p.23

17) 同上

18) 同上書，pp.23～24

19) Simberger，前掲書，p.415